文王、川をつくる

人間だれでも、おのれの容姿を嘲笑されることに恥辱と憤怒を感ずるものである。

それが日常、自分の負い目であることを自覚していればなおのことであるが、六郷文王、貧相この上もなく、それでも本人は寒山拾得のように超然として悟りの境地にいるつもりである。

しかし、それは本人だけのことで、道行く人はその異相と、いつ風呂を浴びたかわからぬ異臭にへきえきしながら袖引きあって笑うのである。

貝の窪から、町の入り口までは一直線である。目に見えながら町は遠いけれども、さすがに町が近くなってくると人通りも多くなる。その人通りの中を文王は骨皮筋右衛門のような格好で歩いている。

〽花咲かば告げんと言いし山里のオオ…

などと気取ってはいるが一向にサマにならない。

通行人はその姿との異和感に、耳に口を寄せてささやき笑いあうのである。中には無遠慮に高声で文王を指さして笑う男もいる。

文王、はじめのうちはわれ関せずのふりをしていたが、だんだんと怒りがこみあげ、呪文を唱えはじめた。

すると、街道を横切り小さな一筋の水が走った。とみるや、しだいにその幅を広げ、やがて向こう岸へ声も届かぬほどの川と化した。

まず旅あきんど風の男が、「こんな所に川はなかったハズだが…」といぶかりながら川に足を入れる。川は思ったほど深くはない。裾を少しずつまくって川を渡り始めると続いて浪人風の男、町家の新造も、うら若い娘も、乳母らしい女も、武家の妻女も裾をたくしあげて川を渡る。

川の中央あたりになると深さも二尺を越して、女共は恥じらいも忘れてあられもない姿になってしまった。

文王を笑った人達が川を渡り切り、ヤレヤレと身づくろいを終わると、ふしぎや、川がすうっと消えて、何事もなかったようにまた元の羽州路とかえった。

文王、そのころはもう町へ着き、魚屋の店先にひやかしの客となっていた。